

以前、とあるテレビ番組でお金の成り立ち、つまり、お金や貨幣というものがどうやってできたのか、というドキュメンタリー番組を観た。まずは物々交換の時期があり、次に、米や小麦を単位にして品物をやりとりした。米や麦は、物々交換に比べたら日持ちもするし、単位も小さく、ずっと使いやすいものであったけれど、やはり、古くなって劣化したり場所を取ったりする。その後、米や麦の代わりになるものとして、最初の貨幣、金や銀のコインが生まれた、という話だった。

誰もが知っている貨幣経済の成り立ちではあるが、その番組を観ていて大変印象に残ったのが、コインが生まれたことよって、人々に大きな余裕が生まれたという話だった。物々交換していた食べ物と違って、コインは置いておいたり、貯めたりすることができ、ただただ日々の食事の確保に追われるだけだった生活から、それ以外の時間ができた。分業も可能となり、社会はこれまでとは比べものにならないほど、大きく発展し、変化した。

その時私は、お金というものがなければ小説家という職業もなかっただろうと思った。完全に自給自足をしていたり、物々交換をしている時代には、小説を書いて日々の糧を得る方法がなかったし、そもそも小説を書いたり読んだりすることさえ思いつかなかったはずだ。

お金と小説

原田ひ香



絵・江口修平

それからお金の見方が変わった。ただ単に、小説を書いてお金をもらおう、という関係から、お金がなかったら、小説もないし、小説家もありえなかったとする、もう一歩踏み込んだ関係だ。

さらに最近、私はお金を「労働と労働を交換するもの」だと気づかされた。

例えば、私が家を誰かに造ってもらって、代わりに私の原稿をあげます、と言ったら、工務店の方は驚くし、困るだけだろう。だけど、出るところに出れば、この紙に書いた文字は多少の価値を生む。私が原稿を出版社に渡し、それが本になって書店に並べば、買ってくださいる方がある。そこから私はお金をもらって、工務店の人に支払うことができる。なんて、ありがたいことだろう。

一説に、日本の最初の専業作家、つまり、作家だけで食べていた人は井原西鶴らしい。それ以前は、紫式部も清少納言も宮中の女房として働く傍ら小説やエッセイを書く、兼業作家だった。井原西鶴が専業作家になれたのは、それだけ人口が増え、字を読める人が増え、芝居を観て楽しめる人たちがたくさん現れたおかげだ。

やはり、経済と人口と小説は切っても切れない縁がある。日々、お金に感謝し……と言うとまるでお金のことがかり考えている守銭奴のように聞こえるかもしれないが、私は「お金」というシステムそのものに感謝したい。

はらだ・ひか●小説家。神奈川県生まれ。2005年「リトルプリンセス2号」で第34回NHK創作ラジオドラマ大賞受賞。07年『はじまらないティータイム』で第31回すばる文学賞受賞。他の著書に「三人屋」「ランチ酒」シリーズ、『東京ロンダリング』『母親ウエスタン』『一橋桐子(76)の犯罪日記』『口福のレシピ』『三千円の使いかた』『DRY』『母親からの小包はなんでこんなにダサイのか』など多数。



撮影：喜多剛士